

故事成語を題材としたレポート作成

松尾肇子*

1. はじめに

本稿に報告するのは、人文学部2年生を対象とする基礎演習において筆者が実施している授業である。2年次基礎演習はプレゼンテーションとレポート作成とが全クラス統一課題となっており、シラバスでは到達目標を「レジュメや様々な資料を使って、わかりやすくプレゼンテーションすることができる。聞く力を向上させることによって、的確に質問し、意見を述べるなど、グループ・ディスカッションに積極的に参加できるようになる。口頭発表や質疑応答を踏まえ、レポート（作品）を作成する。」に統一している。ただし、素材はゼミ担当教員にまかされている。筆者は国語の成立への関心から、全15回の前半は故事成語についての個別レポート作成を課し、後半は唱歌・童謡を題材としてグループでのパワーポイントによるプレゼンテーションを課して、平成27年度秋学期から3年間7クラスで実施してきた。

故事成語は漢文に起源をもつものがほとんどを占める。国語科教科書の漢文教材としては、小学校および中学校では漢詩と『論語』、高等学校の「国語総合」では漢詩のほかに思想や史伝の文章が加わる。そのいずれにおいても故事成語の出典が好んで取り上げられている。またそうした単元の末尾には故事成語の由来と意味を調べさせる言語活動やコラムが置かれていることが多い。一方、高校までに学んだ国語科の学習教材において、生徒にとって最も難しく感じられるのは漢文のようだ。人文学部学生たちの感想は、ひたすら書下し文にしたり句形を丸覚えしたりしたが、その内容はほとんど覚えていないというものである。大学に進学しない生徒も含めて、故事成語や慣用語の意味を知り理解を深め、実生活で適確に使えるようになることは、言語生活を豊かにすることに資すると思われるのだが、生徒はそれを実感として持ちにくいことが窺える。そこで新聞における使用例を調査することで、そのことに気づいてもらいたいと願って当該実践を行なっている。

2. 授業の実際

2年次基礎演習は全15回、本稿で扱うレポート課題については8回程度をあて、標準的には以下のように進めている。ただし、クラス規模はセメスターによって8名～19名の幅があり、特にデータベースの同時アクセス数には制限があるため人数に応じて回数を調整する必要があり、10回程度になることもある。〔第1回〕まず、プリント（資料1）を配布して授業の進め方を説明する。その後、高校生用『新版初訂正 新訂総合国語便覧』（第一学習社、1978年初版、2007年改訂36版、以下、『国語便覧』と略称）から「故事成語」の部分を配布して全体に目を通させる。その中から自由に一つを選ばせ、重複のないよう調整する。『国語便覧』には、総ルビを付した故事成語のそれぞれに出典と意味とが書かれている。レポートにする際には、必ず出典の書籍を探して当該箇所を含む前後を読むこと、データベースを十分に活用することの2点を強調する。インターネットの情報は信頼性に問題のあるものもあるのでドメイン等に注意して使用の適否を見極めること、また調査の端緒として利用してもよいがレポートにそのまま使用することは避けるよう注意を与える。

* 東海学園大学人文学部教授

〔第2回〕本学図書館が契約しているデータベース「ジャパンナレッジLib」を活用して意味や出典の概略を調べさせる。「ジャパンナレッジLib」は幅広い使用が可能で、使い慣れればたいへん便利なデータベースである。1年次の基礎演習でも図書館ガイダンス中で紹介し試用させているが、その後の学生生活の中で使用している学生は多くないようである。授業では改めて概要と横断検索や絞り込みの方法とを説明した後、本学のアクセス数に応じて順次交替して確認させる。担当する故事成語の意味は『国語便覧』にすでに記されているが、「ジャパンナレッジLib」を横断検索することによって辞書による解説の違いに気づかせ、あわせて書物や著者の概要を歴史事典や人名辞典といった専門辞典によっても調べさせる。学生はその後レポート完成まで随時アクセスして調べ直している。アクセス待ちの間に、OPACを使用して出典となった書籍の、本学における所蔵状態を確認させ、借り出してくるよう指示する。

〔第3回〕個々の学生が借り出してきた書籍について、「解題」にはその書籍や著者についての詳

しい解説のほか研究史等も書かれていることに注意を促し、また索引があれば容易に目的の文章を見つけられるなど、書籍の全体を十分に活用するよう伝える。

続いて、新聞記事における用例を検索させる。検索には本学図書館が契約している新聞記事データベースを使用する。一般全国紙として朝日新聞・毎日新聞・読売新聞、地方紙として中日新聞、専門紙として日本経済新聞の5紙を指定し、使用方法を説明する。当該新聞社発行の雑誌も検索可能であるが、まずは比較のため条件をそろえるよう指示する。すなわち上記新聞の全国版の過去10年間を対象として、用例数を調べさせ、全員分をまとめた一覧表をレポート集の冒頭に掲載している。各社データベースの検索方法はそれぞれに異なるため一度の説明では使いこなせない。座席の近い2～3人ほどで教え合うよう指導する。新聞記事データベースのアクセス数は、日経新聞以外は非常に少ないので、レポートの執筆と並行しながら調査させる。

〔第4、5回〕調査と執筆を各自のペースで進めさせる。執筆については、最初に大学生のレポートとして相応の書式で書くことを強調し、1年次に使用した教科書を参照しつつ、Wordを使用したレポートの書き方を復習する。特に、引用や要約の記載方法とその注の付け方は、かなりの学生が十分には身につけていない実態があるため、一人ずつ実際にパソコンを操作させて徹底をはかる。レポートに必要な項目は配布プリントに指示してあるので、学生にとっての主たる課題は用例の分析である。特徴を取り出したり問題点を見いだしたりするために友人と相談することは妨げず、また質問を随時受け付けるとともに巡回指導中に個別に問いかけ、行き詰まっている学生とは一緒に考えるようにしている。

〔第6、7回〕教科書に示されているレポート提出前のチェックリストに従って自分のレポートを推敲するよう指示する。その後、学生同士で原稿を交換して読み意見交換し、それを参考にして再稿を作成して提出する。返却された教員の朱が入った原稿を最終稿に仕上げ、印刷する。目次を兼ねた用例数一覧表を付け、全員の原稿を冊子にする。

2年生 基礎演習 レポート課題

故事成語について調べる

目的①レポートの書き方をマスターする

- ・引用と自分の文章を分ける
- ・引用等に注を付ける
- ・参考文献表を付ける
- ・書式を設定し、ページを入れる

②データベースの使用方法を知り、使えるようになる

- ・インターネット情報を使わない
- ・ジャパンナレッジを十分に使用できる
- ・新聞データベースで絞り込みができる
期間・版・朝刊夕刊の別等

レポートについて

全体構成

- 1, 序論
- 2, 本論
 - (1) 意味
出典となった書物およびその著者について
出典となった話の紹介
 - (2) 新聞にみる現在の使用状況 (10年分。ただし状況によって変更可。)
特徴を取り上げて分析する
- 3, 結論

字数：2000字程度 (3000字まで)

(資料1) レポート作成要領説明用紙

〔第8回〕レポート集を読んで全員で相互評価する（資料2）。得点の多いものから1位～3位を発表するとともに、教員の講評を加える。記述式のコメント部分は切り取って担当学生に渡す。また自己評価を含むアンケートを提出させる。

3. 指導の実際と課題

授業で随時個別に応じている相談には共通点があり、アンケートの回答と重なっている。以下の5点である。

1) 出典調査。『国語便覧』には出典の書名篇名と著者名を明記しているが、該当箇所は書いていない。当該の篇を通読して探すことになるが、索引があればより簡単に目的の箇所到達できる。また索引が無い、あるいは探し当てられない場合、信頼性に注意を払いつつインターネットで詳細を載せているものがないか検索してもよいことを指示する。まれに専門的検索サイトで一緒に検索する必要があることもあるが、ほとんどの学生は自力で解決できている。ただ詩文の場合、〔唐 韓愈「柳子厚墓誌銘」〕のように作家と作品名が記されており、ふだん書名検索している学生は途方にくれるようである。特に現代語訳があるものが『文選』『唐詩選』『古文真宝』等の精華集に限られる作品の場合は助言が必要になる。

2) 新聞データベースの用例数。用例検索すると数百、極端な場合1000を超えることがある。あるいは逆にすべて合わせても5未満ということもある。こうした事態に自分では対処できない学生も多い。そのこと自体が考えるに値する問題であることを告げ、多い場合は、対象とする期間を短くする、直近の1年と10年前20年前のように経年変化を見る、掲載面を分けてみるなどの工夫を提案する。少ない場合は、『国語便覧』の形にとらわれていることも多いので、「ずさん（杜撰）」と仮名にする、あるいは「牛耳（を執る）」のように語の一部で検索することを助言する。それでも少なければ雑誌記事に検索対象を拡大し、さらにインターネットでの検索も可としているが、その際には信頼性を確認することを伝える。

3) 論点。最も多く寄せられる相談は、考察すべき点が見つけれないというものである。アンケートにおいても問題点を発見できず困ったというコメントは多い。授業内では、2～3人で話し合いをさせるのだが、それでもかなり難しい。そこで、これまでどのような点に着目してレポートが作成されたかの例を伝えている。学生がどのような点に着目するのか、以下に代表的なものを拾ってみる。（ただし、一文で分かるようにまとめ、表現は若干変えてある。（ ）は当該成語）。

- ・新聞社によって頻度が大きく開いていることを確認できる（天衣無縫）
- ・政治やスポーツの記事で多く使われている（乾坤一擲）
- ・2000年以前に比べ、現在は戦隊ものや学園系のドラマなどの記事に多く使われている（勸善懲惡）
- ・単なる偶然なのか、寅年である2010年のものが最も多かった（虎穴に入らずんば虎子を得ず）

このように、新聞社・掲載面や時間軸による用例の分類とその比較によって差異に気づくことが多い。

- ・新聞の用例は「先手必勝」が10倍以上あり、短く見ただけで意味が分かる「先手必勝」の方が馴染み深

故事成語	評価用紙	評価者	学籍番号	氏名				
以下の①～④の評価項目について、各レポートを1～4の4段階で評価してください。4を高評価とします。 自由記述欄は、この部分のみを執筆者に渡します。直接伝えたいことを書いてください。								
① 誤字・脱字の有無や主述の呼応、また文章の長さなど、日本語の表現として適切ですか。								
② 議論の流れを追いやすい段落構成で、筆者によるつなぎの文が適切ですか。								
③ 用例および問題点の指摘は妥当ですか。								
④ 結論は納得のいくものですか。								
故事成語	コメント	①	②	③	④			
衣食足りて榮辱を知る								
一葉落ちて天下の秋を知る								
井の中の蛙								
眼光紙背に徹す								
肝胆相照らす								
窮鼠猫をかむ								
紅一点								
先んずれば人を制す								
心頭を滅却すれば火もまた涼し								
前門の虎後門の狼								
千慮の一失								
同病相憐れむ								
桃李言わざれども下自ずから蹊を成す								
猫踏の斧								
敗軍の将は兵を語らず								
破竹の勢い								
人を射んとすればまず馬を射よ								
百里を行く者は九十を半ばとす								
満を持す								

（資料2）レポート評価用紙

い言葉だと感じた（先んずれば即ち人を制す）
のように、同義語を比較するものも散見する。

同様に比較によるものであるが、用例と出典とを対照して本来のそれとのずれに気づくことも少なくない。

- ・「まず自分からこれをやるべきだ」というような意味として使われている（先ず隗より始めよ）
- ・字面のせい「文書などがズタズタに改竄されたり、骨抜きにされたりする」という風に誤用されることが多い（換骨奪胎）
- ・文字だけ見れば挟み撃ちにも思えるのではないだろうか。文字から推量したイメージが独り歩きしている感も否めない（前門の虎、後門の狼）
- ・本来の意味「今までだれもしたことのないことをすること」ではなく、「豪快で大胆な様子」として使用されているものがほとんどだった（破天荒）

なお、原義との違いをうまく表現できない学生も多いなか、この「破天荒」のレポートは、平成20年度「国語に対する世論調査」での正答が16.9%に留まったことや、メディアの責任にも及んで、出色だった。

また、対照の視点を表記に置いたものでは、

- ・日本人にでも杜甫の詩の内容を理解しやすくするために戦場で馬に乗っていない「人」を実際に馬に乗っている「将」に変えたのだと考えられる。（人を射んとすればまず馬を射よ）
- ・（新聞に「憐」「哀」の二種類の漢字表記があることから、それぞれを調べ）「憐れむ」の方が適する表記であると思うので原典もこの字を使っている理由がよく分かった。（同病相憐れむ）

などがある。さらに「桐一葉落ちて天下の秋を知る」や「心頭滅却すれば火もまた涼し」のように、日本語のリズムに合わせて変更が加えられている場合や、多数のパロディーがあることに気づく場合もあるが、その理由の考察は難しいようである。

4) 字数制限内での構成。出典や用例を調べて材料は豊富にあるから、コピー&ペーストすれば字数は簡単に増やすことができる。当初字数を制限しなかったところ、長文の記事もそのまま引用する、長いだけのレポートを提出する者が出た。そこで、2000～3000字程度の字数制限を課すことにした。まず十分に考察し、自分で見つけた論点を際立たせる構成を考え、用例を適確に選択して要約したり引用したりするよう繰り返し指導するのだが、なかなかうまくいかないのが現状である。最も多い失敗は、引用の意図を自分の言葉で述べることができず、用例を並列するだけに終わるといものである。そもそも説明しなければならぬということが納得できない学生もいる。提出原稿に朱を入れる際、引用の前後に文を補って返却することも珍しくない。アンケートでも、ほとんどの学生が苦手意識を持っていることが分かる。

5) 相互評価。相互評価の方法として、当初学生による投票を提案したが、抵抗が大きく実施に到らなかった。順位付けられることを嫌ったのである。そこで教員が評価表（資料2）を用意したところ、それへの記入には抵抗がなく、コメント欄の記述は真摯である。自分なりの評価の基準は持てないが、示されればそれに応じて読むことはできるということなのだろうと考えている。ただし、コメントを読んでいると、学生にとって「評価する」とは良い点を見つけることと同義らしく、極端な場合すべて満点を付ける学生もまれにいるので個別に指導している。執筆者の努力を認めたいうで、今後に資するように意見を述べるのは難しいことのようなのである。なお、学生たちの評価は教員の評価と必ずしも一致せず、文章の読みやすさのポイントが高い。あるいは受けを狙ったレポートが高評価を得ることもある。そのため教員の評価は学生のそれとは別に、講評という形をとることにしている。

4. おわりに

学生はこの課題をどう見ているのだろうか。アンケートは、

- ①学習過程を明確に意識する
- ②資料収集の技術を習得し、情報の信頼性の確かめ方が分かる
- ③比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方の理解を深める
- ④複数の資料から適切な情報を得るとともに問題点を発見し、考えを深める
- ⑤論理的に文章を構成し、相手に伝わる表現を工夫する
- ⑥文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方等について評価する

の6項目のそれぞれについて、自らの到達度を問い、自由記述で回答させており、概して丁寧に自己評価している。その結果であるが、①②⑥については、ほとんどの学生は「できた」「かなりできた」と答えており、なかんずく情報の信頼性に注意することができるようになったという回答が多い。③では、比較は「できた」とするものが多いが、分類、さらに関連付けは苦手だという回答が増える。④については「できた」とするものは少なく、友人たちの助言でどうにかなったとか、失敗だったとする者がかなりいる。⑤の論理的文章の記述については、そもそも苦手意識を持っている学生がたいへん多く、大部分の学生が自力ではできなかったと回答している。もちろん筆者も一度でできるようになるとは考えていないので、学生には読み手に伝えたいことを意識すること、繰り返し推敲することや経験を重ねることの重要性と、論説文の読書量を増やすことを心がけるよう伝えている。また⑤の表現の工夫については、⑥と関連して、他の学生のレポートを読んで、同一課題であるにも関わらずそれぞれかなり異なった仕上がりになっていることに驚き、真似てみたい記載方法があったという者は多い。そもそも他の学生のレポートを読んだことがないとか、こんなにきちんとレポートを書いたことがないとかいう声も少なくなき、注の付け方や出典の示し方・引用の仕方が分かった、あるいはデータベースを使えるようになったなど、アカデミックスキルが身についたことを素直によるこんでいるようである。

大学でのレポート執筆を除けば、学生たちが日常生活で「書く」場面はSNSによる発信に尽きる昨今である。絵文字やスタンプなどを使えば、一文を書く必要さえなく通信は行なえる。そこで新聞記事を読み、社会人として身につけたい語彙力を強化することも兼ねて継続してきた故事成語レポートであるが、後日、他のレポートを書く際にこの経験が役立っていると報告してくれる学生もいるのは、大変うれしいことである。今後は、自らの考えの形成の深化のために、小グループによる共有と討議をどの時点にどのように組み込むのが効果的か、あるいは効果的な指導方法がほかにないか、工夫と考察を続けたい。